

研究の目的と方法

本稿は原始仏教聖典に記されている記述を材料にして、釈尊や仏弟子たちがどのようなルートをとって遊行したか、あるいは商人たちはどのようなルートを通して通商したかということ調査し、その結果を地図上に描いてみようとするものである。

以下に、なぜこのような論文を書こうとしたかという目的と、これを明らかにしようとする方法と手順を記す。

[1] 直接的目的と間接的目的

[1-1] われわれ釈尊伝研究会が「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」を総合テーマとする研究を始めたのは平成4年のことであるから、この『モノグラフ』第20号が刊行されるころにはほぼ満24年を経過することになる。その間、至らない研究成果ではあるがこれを『モノグラフ』19冊に報告してきた。巻末に付したバックナンバーの一覧から知られるように、その大部分は基礎研究と銘打ったものであったし、本稿もまたその一環をなすものである。

「釈尊伝の研究」といいながら、なぜわれわれがインド古代の暦法、1由旬の長さ、janapada と raṭṭha、古代インド人のライフステージ、螺髻梵志と林住者あるいはジャイナ教の修行者の生活法など、一見すれば釈尊の伝記とは関係がなさそうな事項や、釈尊と仏弟子たちの一日や一年の生活方法、あるいはサンガの運営方法などについての研究に力を注いできたかといえ、原始仏教聖典には釈尊の編年史的な記述は決定的に少ないけれども、何気ない記事の背後に釈尊の生涯に関する情報が隠されているにちがいない、それを読み取らぬかぎりは具体的な釈尊の伝記など書きうるはずはない、そのためにはこのような基礎的研究が欠かせないと考えたからである。

そのような意味では、仏教の修行者たちの遊行がどのようになされたかということも必須のアイテムであって、そのコースが遊行と密接に係わり合っていることはいうまでもない。

本稿の【2】「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ」に示したように(pp.125~131)、例えば釈尊や仏弟子たちが王舎城から舎衛城へ、あるいは逆に舎衛城から王舎城へ遊行したという記事は、パ・漢の原始聖典の中に71例が見いだされる。ここにはもちろん、それらが成道何年のどの季節のことで、その遊行にはどれくらいの期間を要し、どこどこを経由したかというようなことは記されていない。

しかしながらわれわれは今までの基礎研究によって、仏弟子たちとは事情が異なるのであるが、釈尊に関してはその遊行できる時期は雨安居が終って次の雨安居が始まるまでの、古代中国暦でいえば9月16日ころから2月15日ころまでのおよそ3ヵ月間のことであって、しかも遊行は最長でも2ヵ月間ほどであったということがわかっている⁽¹⁾。また釈尊が1

日の遊行で歩かれる距離は平均すると 10km ぐらいであるということもわかっている。王舎城と舎衛城を結ぶ直線距離は 440km ほどであるから、したがって直線的に歩いたとしても 44 日間はかかることになる。

しかし 440km というのは直線距離であって、王舎城と舎衛城を結ぶルートには複数があったはずであり、そのいずれを選ぶかによって距離にも相違があり、所要日数も異なる。また釈尊の場合は出家修行者や在家信者の要請によって寄り道したり、途中で本道をそれて脇道に回り道したりしたから、そうするとそのルートによって寄り道し回り道する場所も異なってくることになる。だから釈尊の遊行は平均すると、1 日に進む距離が 10km という驚くほど短い距離になったのである。

しかも仏教の遊行は目的をもった旅であって旅そのものが目的ではなかったから⁽²⁾、目的地には少なくとも数日間は滞在したはずであって、このように考えると釈尊の場合は、1 年の間に王舎城と舎衛城を往復することはできないということになる。

【資料集 2】の「原始仏教聖典資料の仏在処・説処一覧」⁽³⁾において調査しているように、原始仏教聖典における釈尊の在処あるいは説処は、細大漏らさず上げると合計 342 箇所にも及び、このうちヴァジ国 (31 箇所)、アーラヴィー国 (3 箇所)、カーシ国 (10 箇所)、マッラ国 (24 箇所)、ヴィデー八国 (2 箇所)、釈迦国 (30 箇所) などは王舎城と舎衛城を結ぶルートにおいて寄り道し、あるいは回り道した可能性がある場所である。したがって合計 342 箇所のうちの 100 箇所、すなわち 30% くらいは王舎城と舎衛城を往き来する間に立ち寄った可能性がある場所ということになる。

もちろんこれによってすぐさま当該の遊行が釈尊の生涯のいつのことかがわかるわけではないけれども、雨安居の場所や登場人物、あるいは説かれた教えなど様々な状況証拠によってそれが明らかになってくる場合があるわけである。

- (1) 『モノグラフ』第 6 号に掲載した【論文 4】「由旬 (yojana) の再検討」
- (2) 『モノグラフ』第 14 号に掲載した【論文 16】「遊行と僧院の建設とサンガの形成」を参照されたい。
- (3) 金子芳夫が担当し、『モノグラフ』第 2 号に「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧—マガダ国篇」、第 4 号に「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧—祇園精舎 (経蔵) 篇」、第 5 号に「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧—祇園精舎 (律蔵) 篇」、第 8 号に「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧—コーサラ国篇」、第 15 号に「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧—その他国篇」を掲載した。

[1-2] 上記は本稿制作の直接的な目的であるが、もちろん釈尊当時のインドにはどのような通商路があったかという、より一般的な関心もないわけではないことはもちろんである。

本文中で証明するように、釈尊や仏弟子たちの遊行はおそらく当時の通商路を通してなされたであろうから、これを探ることは原始仏教時代の通商路を知る手掛かりになるはずである。

原始仏教時代のインドには南道 (P.: *dakkhiṇāpatha*, Skt.: *dakṣiṇāpatha*) と「北道 (P., Skt.: *uttarāpatha*)」があったとされ、この道路はどの都市とどの都市を結んでいたのであろうか。またこのような幹線道路を中心に道路網はどのように広がっていたのであろうか。このようなことを明らかにすることは、原始仏教時代のインドの経済・文化状況や、中央と地方の関係などを知るよすがになるであろう。

[2] 本稿制作の方法と手順

[2-1] 繰り返すが、本稿は原始仏教時代にはどのような通商・遊行ルートがあったかということ、原始仏教聖典の記述から探ろうとしたものである。そのためには原始仏教聖典に記されているある地点からある地点に移動したという通商・遊行記事を細大漏らさず収集することが基礎作業になることはいうまでもない。その収集方針は、【2】「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ」の凡例に記す。

[2-2] 本稿の最終目的は上記データをもとに、通商・遊行ルートを地図上に描くことである。この描かれたルートは当然、釈尊や仏弟子たちが活動した原始仏教時代の都市あるいは町・村落をつなぐものとなる。しかしながら原始仏教聖典に記されている仏在処や説処のすべてが、地図上のどの地点に比定されるか明らかになっているわけではない。そこで本作業はそれが明らかになっている地点を「基準地点」とし、収集されたデータをこれによって整理することにした。ここに「基準地点」としたのは以下のような地点である。

- ①古代の都市が現代まで存続していたり、遺跡などが発見されたりして、その地図上の位置が確定している地点
- ②遺跡は発見されていないが、状況的に紛れがないと考えられる地点
- ③この総合研究においてすでにその位置が想定されている地点
- ④本稿においてその位置が想定された地点

なお、実際に基準地点とした地点の中には、仏在処・説処ではない地点もいくつか含まれている。南道・北道や中国・辺国などの情報によって、通商・遊行ルートを想定するにあたっては欠かせないと考えられる地点も含めたからである。

それぞれの基準地点が、具体的にはどのような根拠によって特定の地点として設定されたかは、【1】「通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定」に記す。

[2-3] 収集されたデータをこの「基準地点」をもとに整理したのが「基礎データ」である。これは原始仏教聖典に記された生のデータであって、これを「基準地点」がいくつ含まれるかなどの視点から整理して、【2】「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ」に示した。

例えば「釈尊は王舎城から舎衛城に遊行された」という記事があれば、王舎城も舎衛城も基準地点として設定されているから「基準地2点間通商・遊行ルート」基礎データということになり、もし「釈尊は王舎城からヴェーサーリーを経由して舎衛城に遊行された」という記事があれば、ヴェーサーリーも基準地点として設定されているから、これは「基準地3点間通商・遊行ルート」基礎データということになる。もちろん聖典自身には王舎城、ヴェーサーリー、舎衛城における様々な事績が記されているのであるが、今はそれを捨象してただその遊行の経路だけを拾い出したのである。

[2-4] このように聖典の通商・遊行データには、王舎城から舎衛城に行く記事にしても、例えば王舎城から舎衛城に直行するいわば「飛行機的なルート」や、時にはヴェーサーリーを経由する「特急列車的なルート」、さらにはナーランダ、パータリ村、パーヴァー、カ

ピラヴァットゥなどを経由するいわば「各駅停車的なルート」など様々な種類の記事が含まれる。

しかしながらルートというものは「飛行機的なルート」であれ、主要な都市のみに停車する「特急列車的なルート」であれ、地方都市にも停車する「各駅停車的なルート」が繋がっていくものであるから、次に上記の「基礎データ」のすべてを「直近2基準地点間資料」に分解した。

例えば基準地点のA、B、C、Dを結ぶ遊行データがあったとすると、これをA-B、B-C、C-Dに分解したのである。2地点間とすればA-CやA-DあるいはB-Dなどにも分解することができるが、そのような分解はしていない。なぜならせっかく「各駅停車的なルート」がありながら、これを「特急列車的なルート」や「飛行機的なルート」に戻す必要はないからである。これが「直近」の「2基準地点間」という意味である。そしてこれを示したのが【3】「基礎データをもとに加工した『直近2基準地点間』資料」である。これもデータには違いないのであるが、同じデータという言葉を用いると紛らわしいので、これについては「資料」という語を用いることにしたのである。

[2-5] 作業手順としては最初に、この「『直近2基準地点間』資料」をもとに、2地点間を結ぶルートを地図上に**直線**で引いてみた。道路というものは川や山などの地形、あるいは町や村落のある場所によって迂余曲折するものであるが、古代の道路を地形に合わせてリアルに想定することは土台むりな話であり、たとえわかったとしても小さな地図上にそれをリアルに表わすこともできないからである。

こうして作った地図を【**地図 I**】と呼ぶ。地図はインド半島全体を表わすものと、ガンガー河流域（仏教中国）を表わすものとの2つに分割した。前者を【**地図**】-①、後者を【**地図**】-②とする。【3】「基礎データをもとに加工した『直近2基準地点間』資料」に示したように、「直近2基準地点間資料」にはきわめて多数があり、ガンガー河流域を中心とした部分だけで畳1畳分に相当するような大きな地図に描いてみても線が折り重なるようになって、これをここに掲載できるほどに縮小すると、それこそ真っ黒になるだけであるから、この【**地図 I**】は省略してここには掲載しない。

またこれには前述したように王舎城から舎衛城に直行する「飛行機的なルート」や、ヴェーサーリーにしか寄り道しない「特急列車的なルート」などが含まれており、しかも基礎データには原始仏教聖典として信頼できる文献と、少し信頼度に欠ける『増一阿含』や『根本有部律』などがそのまま使われている。

そこでルートの種類や文献の種類別により厳密に検討するために、「『直近2基準地点間』資料」にはそれが次のどれに分類されるかということを示しておいた。

- ①「飛行機資料」とは、直近2基準地点間の直線距離が150km以上のデータ
- ②「1件資料」とは1件しかないデータである。

ただしこの「1件」とは、事例が1件ということであって、例えば釈尊が初転法輪のためにウルヴェーラーからバーラーナシーに行かれ、また戻られたというようなケースは文献としてはいくつもあるが、事例としては1つであるので、このようなものを1件資料として処理したのである。

- ③「増根資料」とは、事例が2点以上あってもそのいずれもが『増一阿含』か『根本有

部律』である場合である。『増一阿含』と『根本有部律』は他の原始仏教聖典に比して成立が新しいとされ、またこの作業を通してわれわれが経験的に現実的ではない特殊なルートが記されている可能性が高いと考えたからである。

[2-6] 次の段階として、「**地図Ⅰ**」から機械的に上記「飛行機資料」「1件資料」「増根資料」を削除して【**地図Ⅱ**】-①、【**地図Ⅱ**】-②を作成した（裏表紙にポケットをつけ、その中に挿入した。その他の地図も同じ）。

ご覧のとおり今度は一転して空白が目立ち、繋がっていてこそ意味があるルートが各所で寸断され、孤立した地名がいくつも見いだされる。

[2-7] そこで次に、この【**地図Ⅰ**】と【**地図Ⅱ**】をもとにして合理的かつ現実的なルートを想定する作業を行った。しかしこの「想定」が恣意的なものとならないよう、次のような要件を建てた。

まず【4】「通商・遊行路を想定するにあたっての基礎的要件」においては、陸上ならびに水上の交通路とはどういうものかという基礎的な要件を考えた。

【5】「通商・遊行路を想定するにあたっての具体的要件」においては、古代インドという地理・風土・文化を背景にした主に陸上交通路の具体的要件を考えた。

さらに【6】「原始仏教聖典に記されたルート①—南道と北道—」、【7】「原始仏教聖典に記されたルート②—中国と辺国—」、【8】「インド古典に記されたルート」においては、原始仏教聖典自身やインド古典に記されている主要幹線道についての情報などを調査した。

そしてこのような基礎的・具体的要件と、古代インドの陸上・水上交通路に関するいくつかの情報を総合的に勘案し、【**地図Ⅱ**】を【**地図Ⅰ**】と突き合わせながら、【**地図Ⅰ**】に描かれているルートのうち復活すべきものを復活し、修正すべきものを修正し、【**地図Ⅰ**】にも描かれていないけれども新設すべきルートを新設した。「修正」したというのは経由地をより合理的なものとしたのであり、「新設」したというのはそのルートがなければルートが繋がらず合理的ではないと判断したルートである。

この「復活」「修正」「新設」した経過と理由・根拠については、【9】「『原始仏教時代の通商・遊行ルート』地図の想定」に記した。

このようにして得られた結果を記入した地図が【**地図Ⅲ**】である。これは仏教中国内のルートを検討したものであるから、【**地図Ⅲ**】-②のみであって、【**地図Ⅲ**】-①はない。

[2-8] ただし【**地図Ⅲ**】は、筆者としては原始仏教聖典に記された通商・遊行に関する全データを、可能な限り客観的合理的に、かつ現実的に処理したつもりであるが、しかし原始仏教聖典といういわば特殊な文献を使ったものであり、所詮は仮説のようなものに止まるといわざるをえないので、そこで最後に、【10】「想定してみた通商・遊行ルート【**地図Ⅲ**】の検証」において、仏教文献によっていることによる偏りや、時代的な変遷、法顕・玄奘の求法僧がたどったルート、あるいは幹線道路や支線道路など様々な視点から検証して、結論としての【**完成地図**】-①、【**完成地図**】-②を作成した。

[3] 凡例

なお本稿執筆に際しての凡例を記しておく。

- (1) 先に述べた原始仏教時代の基準地点とした地名は、【1】「通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定」においてカタカナ表記を用いる以外は、すべてパーリ語のローマ字表記（大文字は **SuzEurU** あるいは **SuzBudCU** 体、小文字は **SuzBudRU** 体）を用いる。例えば舎衛城は **Sāvattthī**、王舎城は **Rājagaha** というように記すということである。ただしサンスクリット文献中に現われる地名についてはそのままサンスクリット語をつかっている。

なお基準地点以外の地名についてはパーリ語のローマ字表記の後に（ ）をつけてそのカタカナ表記を記入しておいた。例えば「**Anupiyā**（アヌピヤー）」「**Koṭigāma**（コーティ村）」などである。

- (2) 現代のインドの地名や河川名についても、インドの現代の地図に用いられているローマ字表記を用いる。ただし現代の名であることがわかるように、これは平成明朝体にした。例えばアッラーハーバードは Allahabad、アヨーディヤーは Ayodhya、ガンガー河は Ganga 河などである。

- (3) 本書でしばしば引用する書物については次のような略称を用いる。またページなどは以下に記した文献によって示す。

『赤沼』：赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』法蔵館、1967

『アショーカ王碑文』：塚本啓祥『アショーカ王碑文』レグルス文庫版 54、1976

『インド誌』：アッリアノス著、大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記 付インド誌（下）』岩波文庫、2001

なお必要に応じて『アレクサンドロス東征記およびインド誌 本文篇』東海大学出版会、1996、『同 註釈篇』1996 も用いている。

『西域記』：水谷真成訳注『大唐西域記1』東洋文庫 653、『大唐西域記2』東洋文庫 655、『大唐西域記3』東洋文庫 657、平凡社、1999

『実利論』：カウティリヤ著、上村勝彦訳『実利論（上）』、『同（下）』岩波文庫、1984

原文は R. P. Kangle : *The Kauṭīliya Arthaśāstra, Part I, A Critical Edition with Glossary, Bombay, 1960 (2nd ed. 1969)*

『平岡』：平岡聡訳『ブッダが謎解く三世の物語（上）』、『同（下）』大蔵出版、2007

原文は E. B. Cowell and R. A. Neil : *Divyāvadāna, A Collection of Early Buddhist legends, Cambridge, 1886*

『法顕伝』：長沢和俊訳注『法顕伝・宋雲行紀』東洋文庫 194、平凡社、1971

なお必要に応じて長沢和俊『法顕伝 訳注・解説』雄山閣、平成8年も用いているが、その場合には略称でなく、フルネームで示してある。

『八尾』：八尾史〔訳注〕『根本説一切有部律薬事』連合出版、2013

Cunningham : Alexander Cunningham, *The Ancient Geography of India*, London,

1871 (インターネット上で使用させて頂いた : Open Library)
Footprints : On the Footprints of the Buddha--Identification of Controversial and Unknown Places, Tanushree Printig Press, Patna, 1966
Malalasekera : G. P. Malalasekera, Dictionary of Pāli Proper Names Vol. I , II, 1983, New Delhi

[4] 本稿の執筆担当者

本稿の執筆者は森章司と金子芳夫の2人であり、【1】【2】【3】は金子、その他は森が担当した。

といっても今までの「論文」「資料集」同様に、本稿も「はじめに」に記した釈尊伝研究会メンバー全体で取り組んだものであって、執筆者というのはこのテーマに関する主たる担当者のご理解いただいたほうがよいであろう。

われわれは月に一度ずつ研究会を行っており、その様子をホームページ (<http://www.sakya-muni.jp/>) 上の「研究ニュース」欄に報告しているが、このテーマについて最初の報告をしたのは2012年10月の定例研究会報告であった。ここには「『原始仏教聖典の仏在処・説処一覧』を編集したときの資料をもとに2点間の移動記事をデータ処理ソフトに入力しており、その作業が8割方終わりました」と記している。この「仏在処・説処一覧」の担当者は金子で、したがって本稿の基礎データもすべて金子が収集したのであるが、この時点での目論見とは違って、金子は「仏在処・説処一覧」を材料とするだけでなくほぼ全原始仏教聖典を対象に、改めてデータを取り直すことになった。

しかしながらこのデータの取り方やデータ処理ソフトのフォーマットづくり、そして実際の処理方法、原稿作成などすべての過程において、ほとんど毎回の研究会において議論しつつ作業を積み重ねてきたのであって、2014年と2015年の5月の連休中にはこれだけを議題とした2泊3日の合宿研究会も行った。そしてこれを最終的にインド地図に書き込んで、これでよしという結論を得たのは2015年6月の研究会であって、この時の「研究ニュース」には、「この日の研究会の課題は、『原始仏教聖典の通商・遊行ルート』の最終結論を得ることでした」と報告している。

このようにまる3年余に及ぶ「通商・遊行ルート」研究の全過程において、研究会のメンバー全員の意見をいただきながら、ここにこうしてこの原稿が完成したのであって、したがってこの原稿の執筆者は釈尊伝研究会の全メンバーであるといって過言ではないことを付記しておきたい。

研究の目的と方法